

1. ところが、ある人はこう言うでしょう。「死者は、どのようにしてよみがえるのか。どのようなからだで来るのか。」 (15:35)
 - a. 今日の箇所は、コリントの教会でさらに大きな論争となっていた復活の問題の続きである。一部の者は復活はないと信じており、今の人生よりも良くなることはないのだから今を楽しもう、という考えであった。
 - b. 現状の生活に満足していた人たちが多かったコリント教会にとっては特に、復活は受け入れ難いテーマであった。現代でも同じようなことが言えるのではないだろうか。
 - c. しかし、この手紙を書いたパウロ自身のように、キリストに命をささげる決心をした者にとっては、この世的な暮らしをしながらさらに天国へ行く、ということは考えられなかった。
 - d. 彼の経験から、キリストにすべてをささげたなら復活だけが唯一の真の希望だということに疑いの余地はなかった。この世には困難、苦しみ、迫害、犠牲、戦いがある。パウロ自身の言葉を借りるなら、朽ちるもの、卑しいもの、弱いもの、血肉のもの、にあふれている。
 - e. 死者の復活については現代の私たちにとっても2つの疑問が生じる。死者はどのような体をもってどのように復活するのか？
2. 愚かな人だ。あなたの蒔く物は、死ななければ、生かされません。あなたが蒔く物は、のちでできるからだではなく、麦やそのほかの穀物の種粒です。 (15:36-37)
 - a. 死んだものがよみがえる、という現象についてパウロは、神話的、奇跡的な見地からではなく理知的に、種が地に落ち形を変えて植物や木になる、という日常的な例を挙げて説明している。
 - b. 種は種としての形を失っても別の収容力をもって生き続けるように、私たちのいのちもそのようになる。(ちなみにこれにはイエスが話された種についてのたとえを正しく理解しているかという問題提起にもなる。)
3. しかし神は、みこころに従って、それからからだを与え、おのおのの種にそれぞれのからだをお与えになります。すべての肉が同じではなく、人間の肉もあり、獣の肉もあり、鳥の肉もあり、魚の肉もあります。また、天上のからだもあり、地上のからだもあり、天上のからだの栄光と地上のからだの栄光とは異なっており、太陽の栄光もあり、月の栄光もあり、星の栄光もあります。個々の星によって栄光が違います。 (15:38-41)
 - a. 肉体のことが問題になった理由の一つは、霊は良いもので体(物質)は悪いもの、という考えがあったからである。時には私たちもそのような考えに影響されることがある。しかし聖書はそのようには教えていない。神は物質的な世界も創られ、私たちは肉体を持つものとして創造された。
 - b. では私たちのからだはどうなるのだろうか。「朽ちるもので蒔かれ、朽ちないものによみがえらされ、卑しいもので蒔かれ、栄光あるものによみがえらされ、弱いもので蒔かれ、強いものによみがえらされ、血肉のからだで蒔かれ、御霊に属するからだによみがえらされるのです (42-44)。」
 - c. 復活のからだは、御霊によって生かされるからだである。